

# 学術情報センター ニュース

## 第 20 号目次

- 新年度にあたって…………… 2
- ILL システム運用開始…………… 4
- 松田文部政務次官, 学術情報センター  
を視察…………… 4
- バックランド教授, ロバートソン教授  
来訪…………… 5
- 《研究開発》
- 英国における NACSIS-CAT  
パイロット・プロジェクト  
—Pilot Phaseの報告—…………… 6
- 英国の大学図書館による NACSIS-CAT  
試用の状況—英国出張報告—…………… 9
- 台湾の国際資訊发展新趨勢検討会に  
参加して…………… 10
- 科学技術の先端に関する国連大学  
第 2 回国際シンポジウム:  
科学技術への拡大アクセス  
—情報技術の役割—…………… 12
- 「IRDAC Round Table on Scientific and  
Technical Information」参加報告…………… 14
- 米国 AAS/CEAL 会議報告…………… 16
- フード・ネットワークとストックホルム  
大学図書館の接続相談…………… 18
- 《NACSIS サービス案内》
- 「木簡データベース」のサービス開始…………… 20
- 「RAMBIOS」(仮称)の  
サービス開始…………… 21
- 電子メールサービス (NACSIS-MAIL)  
のコマンド機能向上と利用者マニュアル  
(第 3 版)の発行…………… 22
- 「NACSIS 利用の手引 (第 2 版)」  
の発行…………… 22
- 「NACSIS-IR 総合マニュアル (改訂版)」  
の刊行…………… 23
- 学術情報ネットワーク (パケット交換網)  
加入機関…………… 24
- NACSIS-IR システム・データベース  
収納状況…………… 25
- 接続ニュース…………… 26
- NACSIS-CAT システム・データベース  
構築状況…………… 27
- 《教育・研修》
- 目録所在情報サービス利用説明会の  
開催…………… 28
- 海外実務担当者研修報告  
—台湾師範大学図書館および  
英国 C A T 参加機関の担当者—…………… 28
- 学術情報センターシンポジウムなどの  
開催予定…………… 29
- 平成 4 年度 NACSIS-IR 講習  
(総合コース)の追加…………… 29
- 平成 4 年度目録システム講習会  
(地域講習会)の変更…………… 29
- 《刊行物》
- 学術情報センター刊行物一覧…………… 30
- 《その他》
- 学術情報センター参与・評議員・  
運営協議員・委員会委員名簿…………… 31
- 学術情報センター電話番号…………… 33
- 人事異動…………… 34
- 学術情報センター日誌…………… 36
- 海外渡航一覧…………… 36

## 新年度にあたって

学術情報センター所長

いのせ ひろし  
猪瀬 博



昭和61年に発足した当センターは、7年目を迎えました。本年1月から順調に稼働を開始した新システムは、従来の2倍の総合性能をもち、磁気ディスクの容量も1テラバイトを越えるようになりました。総勢99名の小さな所帯ではありますが、この新システムを最大限に活用し、利用者の皆様の御期待に応えて参りたいと意気込んでおります。

ネットワークの拡充も順調に進められております。国内パケット交換網については、従来の27ノードに加えて、横浜国立大学に新たなノード機器を設置し、本年1月からサービスを開始しました。また既設ノードの機器の増強及び回線の高速化も推進しました。これによって現在、全国の180の大学等に属する387のコンピュータ等にサービスを提供しております。

また学内ローカル・エリア・ネットワーク（LAN）の普及に対応するため、TCP/IPプロトコルによるLAN間接続を可能とするよう、8つのノードにルータを設置し、これらを高速回線で接続する、インターネット・バックボーンSINETの構築に着手し、本年4月から正式な運用を開始しました。これは従来のパケット交換網とも接続し、より高速なネットワーク間通信を実現する幹線網であります。

さらに国内におけるSINETの整備と平行して、国際インターネットとの相互接続を可能とするため、本年2月に米国カリフォルニア州のNASA/ARC (National Aeronautics and Space Administration / Ames Research Center) との間に192Kbpsの国際回線を敷設し、4月から運用を開始しました。これにともないワシントンD.C.の米国国立科学財団(NSF)及びロンドンの英国図書館への接続はNASA/ARC経由の専用回線に変更しました。

次に電子メールサービスにつきましては、新国際規格MHS方式による国内電子メールサービスを昭和63年から全国にさきがけて提供して来ましたが、平成3年度には7つの大型計算機センターとの共同運用に拡大され、本年度には情報処理センター等の加入も見込まれるようになりました。また国際電子メールサービスにつきましては、CSNETのインターネットへの吸収、BITNETとの接続経路の変更などにともない、所要の措置を講じ、引続きサービスを行っています。

データベース事業も引続き拡充に努めて参りましたが、平成3年度には、これまでの18種類のデータベースの作成に、より多くの学協会の協力が得られ内容の充実をはかることができました。また情報検索サービスにつきましては、従来の30種類に加え、新たに7種類のサービスを開始しましたが、この中には経済学文献索引データベース、維新史料綱要データベースなど、人文社会系のものも含まれております。さらに大学等の研究者から提供されるデータベースの受入れについても進展がみられ、今年度中にいくつかのサービスが開始される予定です。

目録所在情報事業も着実に進展しております。オンライン接続されている図書館数は192

に達し、目録端末総数は1700を越えるという、巨大なシステムが形成され、登録データ数も700万に達しようとしております。また図書館による文献複写／相互貸借（ILL）サービスの支援システムを開発し、昨年11月に66大学にモニターをお願いして実現性を確認した後、本年4月からサービスを開始しましたが、利用は順調に拡大しております。本年度は情報検索サービスとの連携を可能とするシステム開発を行い、より高度の利用形態を実現する予定です。学術雑誌総合目録和文編の改訂事業につきましては、700余の大学図書館等の御協力を得て、約7万タイトル、145万件の登録を完了し、データベースの全面更新を完了しました。7分冊、約7500ページの冊子体も刊行されました。本年度は欧文編の改訂事業に再度取組む予定でありまして、引続き皆様の御協力をお願い申し上げます。

国際事業も多角的に展開して参りました。英国図書館及びケンブリッジ大学、オックスフォード大学、シェフィールド大学、スターリング大学の研究図書館との間では、目録所在情報システムのオンライン試用を開始し、英国における日本語資料の総合目録作成に協力しております。また当センターで作成している18種類のデータベースの情報検索サービスを、米国国立科学財団、米国議会図書館、英国図書館などに提供するとともに、日仏会館、ドイツ国立情報処理研究所東京事務所、スタンフォード大学日本センターなど在外の外国機関に対してもサービスを始めました。国際インターネットとの接続と国際回線の再編成については、すでに述べましたが、英国図書館のBLNETを介して、英国の学術研究ネットワークJANETにも接続が可能となりました。

教育・訓練事業も順調に発展しております。目録所在情報データベースのデータ入力のために各接続図書館における中核的人材を養成することを目的とする、4週間の実務研修を平成3年度には2回開催し、32人の方々が受講されました。また目録所在情報サービスの利用・運用を担当される図書館職員を対象とする、4日間の目録講習会を、学術情報センターで7回、各地域で16回開催し、合計373人の方々が受講されました。さらに大学等の図書館で情報検索サービスの代行検索を担当している方々を対象とする、1日講習会を5回開催し128人の方々が受講されました。このほか文献複写／相互貸借支援（ILL）サービスの円滑な運用をはかるため、担当者を対象とする1日講習会を5回開催し、140人の方々が受講されました。増大する御要望に応えるため、本年度はこれらの研修事業を一段と強化する計画であります。

以上の諸事業の展開を支援するとともに、情報科学の先導的諸分野の研究を推進するため、研究開発部は努力を続けて参りました。すなわち各研究部門に固有の分野の研究を進めるとともに、横断的なプロジェクト研究も行ってきました。プロジェクト研究としては、当センターの目録所在情報システムの急速な大規模化に対応するための、並列処理機能の導入を含む大規模トランザクション処理システムの研究や大規模ファイルサーバの構成研究をあげることができます。また文献の一次情報を蓄積しオンライン検索・提供を一貫して行う、電子図書館システムの開発も進められています。さらに全文データベースは当センターの先導的なサービスとして注目を集めていますが、文献の論理構造にもとづく検索システムの研究開発も行って、その高度利用を可能にすべく努力しております。このほかにも、ユーザ・フレンドリーなマルチメディア・インターフェース、東アジア言語処理、高速ネットワークの構成など、多様なプロジェクトが進行しており、それらの中には、国内外に開かれた共同研究の形をとっているものもあります。

以上、当センターの現状と課題の概要を御報告しましたが、本年度も皆様から引続き、御支援、御指導を賜りますようお願い申し上げます。

## ILL システム運用開始

4月1日からILL（Inter-library Loan：図書館間相互貸借）システムのサービスを開始した。大学図書館をはじめとする目録所在情報サービスの参加館では、相互貸借業務（文献複写及び現物貸借）において、ILLシステムを利用することにより業務の効率化と、利用者への原報提供の迅速化が図れるものと期待されている。

システムの利用状況では、レコード件数が初日から順調に増加し、5月末現在の累計で4万件に達した。1日平均にすると約1,000件になるが、平成2年度の大学図書館全体での依頼件数が1日平均で2,000件弱であったので、1日1,000件というのは全体の過半数に相当する。しかも、曜日による増減も小さく、安定的に増加している。このことから、各図書館においてはILLシステムの利用が定常的な業務として位置づけられていることが推察できる。

また、実際にILLシステムを利用した図書館室は235館であったが、これは大学図書館全体のはほぼ2割の規模に相当する。すなわち、2割の参加館で全体の過半数に達する件数がILLシステムによって依頼されていることになる。今後、新規参加館が増えるとともに件数も大幅に増加し、またシステム化の評価が高まることも与かってILLサービス自体が活発化し、学術情報の流通がより円滑化するものと期待されている。

学術情報センターではILLシステムの操作性を向上させ、性能を強化するために引き続きシステムの改善を図っていく予定である。

## 松田文部政務次官，学術情報センターを視察

松田文部政務次官は、去る4月10日午前、鳴野学術情報課長を伴い約1時間30分にわたって学術情報センターを視察した。

この日、正面玄関で職員の出迎えを受けた政務次官は、所長室でセンター紹介のビデオを見た後、猪瀬所長、西田副所長及び山田研究開発部長等と懇談を行い、センターの現状、概要等について説明を受けた後、施設の視察を行った。



政務次官は、1テラバイトの磁気ディスク等の周辺装置を有する電子計算機室を視察し、講習会室でのNACISIS-CAT、IR等のデモンストレーション操作では、説明の担当者に対し熱心に質問を行っていた。

帰り際、教職員一同に対し、学術情報センターの現状がよく理解できたこと、又、さらに今後の発展を望む旨の激励の言葉があった。

## バックランド教授，ロバートソン教授来訪

米国カリフォルニア大学バークレイ校 M. K. Buckland 教授，英国シティ大学 S. E. Robertson 教授は，京都において開催されたシンポジウム，「科学技術への拡大アクセス」（国連大学・京都大学主催）に出席のため来日し，5月11日と15日に，相次いで学術情報センターを来訪された（同シンポジウムには，当センターから山田研究開発部長が出席）。



〈 M. K. Buckland 教授 〉

両教授とも，図書館情報学分野のエキスパートであり，

シンポジウム前後の日程を利用して見学を希望された日本の図書館，図書館学校及び関連機関の一つとして，かねてより研究開発部の教官と交流のあった当センターをお訪ねになった。

11日，15日両日とも，ビデオテープを含むセンターの事業活動，研究内容の説明の後，目録所在情報サービス，情報検索サービスのデモンストレーションをご覧いただき，その内容について熱心な質問を受けた。

Buckland 教授は，山田研究開発部長，井上主幹，根岸教授，宮澤教授，安達助教授



〈 S. E. Robertson 教授 〉

と懇談され，現在の図書館が抱えている問題点，電子図書館，情報検索等について活発な意見を交わされた。また，Robertson 教授は，井上主幹，根岸教授，宮澤教授，安達助教授らと懇談になり，日英の研究支援機能の比較，情報検索システムにおける自然言語処理，漢字の文字コード変換等について熱心に討論された。

# 英国における NACSIS-CAT パイロット・プロジェクト

— Pilot Phase の報告 —

英国 CAT ワーキング・グループ

## 1. 経緯

英国で NACSIS-CAT を使うことになったについては、日英に共通するルーツが二つ有る。一つは、1989年末から準備を始め、1990年1月に実現した NACSIS と英国図書館との国際接続、及びそれにともなって実現した NACSIS-IR の英国図書館への提供である。もう一つは、1989年10月、ベルリンで開催された第2回日本情報国際会議で行われた NACSIS-CAT のオンライン・デモンストレーションが、会議に参加していたケンブリッジ大学図書館の小山騰氏の目を引き、この会議に引き続いて開催された日本資料専門家欧州協会 (EAJRS : European Association of Japanese Resource Specialists) の設立総会で、英国の日本語図書目録の作成に NACSIS-CAT を利用したい旨の提案がなされたことである。英国には日本語文献を収集・提供する学術機関が集まった、Japan Library Group (JLG) というものがあるが分担収集などに効果を挙げているが、小山氏はそのプロモーターの一人でもある。

以降、このプロジェクト推進のため、NACSIS 側は大野副所長 (当時)、英国側は英国図書館研究開発部 (BL / R & DD) の部長 Brian Perry 氏がそれぞれ代表者となって、下記『英国 NACSIS-CAT パイロット・プロジェクト』合意書を始め種々の取り決めが行なわれ、1990年12月には第1回の EAJRS 会議で、全欧州という場で日英双方から発表が行われ、同12月には目録端末として東芝 J-3100、ソフトウェアとして LUMINA が英国の5つの参加図書館に提供され、1991年1月には英国図書館で NACSIS-CAT の操作説明会が行われ、その後多少手間は取ったが1991年秋には各図書館とも接続を果たし、12月からはケンブリッジ大学、オックスフォード大学を始めとして入力が始まった。本年3月末には第1フェーズ終了にともなる報告書が英国図書館から提出され、更に、双方の合意に基づいて平成4年から第2フェーズに移ろうとするとところである。

## 2. 『英国 NACSIS-CAT パイロット・プロジェクト』の目的と参加機関

センター内の通称は『英国 CAT』である。日英双方で交わした合意書には、このプロジェクトの目的と英国側参加機関が次の通り記載されている。

### (1) 目的

- 01) NACSIS-CAT を利用して、英国側のプロジェクト参加機関がそれぞれ所有する日本語資料の共同目録を編集することの実現可能性を評価すること
- 02) 目録端末 J-3100 と UIP ソフトウェア LUMINA の有効性を評価すること
- 03) NACSIS-BL LINK を介し、NACSIS-CAT への JANET (Joint Academic Network = 英国の学術情報ネットワーク) 経由の接続を評価すること
- 04) RLIN (Research Libraries Network = 米国の書誌ユティリティ)、OCLC (Online

Computer Library Center=米国の書誌ユティリティ), JAPAN MARC テープ等を利用した目録作成の他の手段と比較すること

- 05) 一部もしくは全部の参加機関の入力データから試験的に総合目録データベースを編纂すること(目録データベースはケンブリッジ大学に置く)

(2) 参加機関(英国側)

- 01) British Library, Oriental and Indian Office Collections (BL OIOC)  
 — Mrs Yu-Ying Brown, Mr Hamish Todd  
 British Library, Japan Information Service (BL JIS)  
 — Mrs Shirley King (後に, Mr Chris Dillon と交替)
- 02) Cambridge University — Professor Richard Bowling, Mr Noboru Koyama
- 03) Oxford University — Mrs Izumi Tytler, Mr Tony Hyder
- 04) Sheffield University — Ms Fiona Harrison
- 05) Stirling University — Mrs Val Hamilton

この他に, 英国図書館研究開発部の Brian Perry 部長, Dr Terry Cannon, Mr Neil Smith の3氏がそれぞれの立場から協力した。

### 3. パイロット・プロジェクトの実施

東芝による J-3100 提供の確認, 英国5研究図書館を対象としたパイロット・プロジェクトとすること, NACSIS 側大野副所長, 英国側 BL / R & DD の Brian Perry 部長を代表者とすること等の案を固めて, いよいよ大野副所長から B. Perry 部長宛に最初の提案を行ったのは, 今からちょうど2年前の1990年5月10日である。以下, それぞれの側の関係者による組織づくりを踏まえて, 日英相互の訪問と打ち合わせ, 文通と文書の交換, 電話, FAX, 電子メール等の手段を通じて連絡を取り合いながら推進した。

英国側は, 1990年7月5日に BL とケンブリッジ大学との間で予備会談を開き, 次いで1990年8月2日に第1回の Project Committee (上記参加機関で構成) を開いて参加機関の間でプロジェクトの概要を確認した。以下, 1990年11月22日には接続問題に関する対応状況, Daiwa 基金の用途, 講習会, ケンブリッジ大学による SOAS (ロンドン大学 School of Oriental and African Studies) のデータ処理等が, 1991年8月15日には, JANET のゲートウェイをロンドン大学へ移設すること, レコードのダウンロード, 運転時間帯の拡張, 参加機関による NACSIS-IR の利用等が, 1991年11月4日には, 接続後の各大学での進行状況, 相互の連絡の効率化, LUMINA の問題点等が, 明けて1992年3月9日には, これまでの問題点の包括的な整理や報告書の検討に加えて, 第2フェーズの目的についても検討している。

NACSIS 側は, 大野副所長を中心に, システム管理課を担当部署とするグループで, 企画調整会議並びに運営会議に諮って意思決定をしてきたが, 1992年1月14日になって大野副所長を主査とする「英国 CAT ワーキンググループ」が発足し, 以後今日まで5回の会合を重ねてきた。主な議題は, 英国側におけるそれに加えて, NAC-PC (LUMINA II に替わるソフトウェア) の可能性, CD-ROM による目録データ提供の可能性, NACSIS-IR 用通信ソフトの検討等が含まれる。

英国との接続は、1991年1月9日の「NACSIS-CAT 操作説明会」(hands-on experience と呼ばれる) 時点では BLNET を介した BL のみとの接続であったが、その後各参加館と JANET 経由で接続し、更に本年2月には英国との接続を米国の NASA / ARC 経由に改めた。また、当初教育モード、業務モードともに木曜日の18時から21時までだった運用時間を、本年4月から木曜日を除く毎日22時から午前1時まで延長した。

これまで学術情報センターは、英国への NACSIS-CAT の提供を、将来の EAJRS グループ全体への提供のモデルとしたいという立場を取ってきており、この点は英国側も同様の関心を持っていた。学術情報センターでは、このため、『欧州における日本書誌情報ネットワークの構築に関する調査研究』というテーマで、(財)国際コミュニケーション基金に申請をし、平成4年から2年間に亘る助成が認められた。英国 CAT プロジェクトを事業として定着させる一方、次の段階を目指しての研究・開発である。

#### 4. 『パイロット・プロジェクト報告書』の概要

パイロット・プロジェクトは1992年3月までとし、その時点での報告書を英国側が作成することが合意された。その報告書はプロジェクト・マネージャーである英国図書館研究開発部の Neil Smith 氏を中心に『Research Project on the Feasibility of a UK Collaborative Catalogue of Japanese Publications, report to NACSIS of the Pilot Phase, March 1992』と題して編集され、NACSIS に届けられた。

『報告書』は、背景、概要、結論で構成した総論と、各参加機関(ケンブリッジ、オックスフォード、シェフィールド、スターリングの各大学と BL OIOC, BL JIS) 毎の報告で構成した各論とから成る。結論は、プロジェクトの5項目の目的別に編集されている。結論だけ簡単に要約すれば、(1) NACSIS-CAT による共同目録の可能性評価は、その可能性を認めつつも、UKMARC 等へのコンバージョンがこれからの問題であること、(2) 目録端末と UIP ソフトウェアでは、ハードウェアはいいがソフトウェア(LUMINA)に問題があること、(3) ネットワーク接続は、初期の段階で最も多くの問題を抱えた課題であったこと、(4) 他の目録作成の手段との比較は、接続の遅れ、時差等の理由から検討する時間が十分取れなかったこと、(5) 総合目録の編集実験は(1)のコンバージョン問題と関連して、次の課題であること、等である。更に、総括のまた総括とでも言うべき要約部分において、各参加大学におけるコンピュータ・システムの相違、各参加機関の目録システムの相違、作業従事者の各参加機関における立場の相違が、問題中の最大問題として特筆大書されている。

#### 参考文献

これまで、英国 CAT プロジェクトの進捗状況については、学術情報センター・ニュースの、10号(1989.12)、11号(1990.3)、13号(1990.10)、14号(1990.12)、15号(1991.3)の各号でその都度概略をお知らせしてきた。欧州では、EAJRS の第1回年次総会(1990.5.5-8 ブダベスト)で、学術情報センター根岸教授、BL JIS(当時) Ms Shirley King、ケンブリッジ大学図書館小山騰氏の分担による紹介が行われ、1991年5月、フランスのナンシーで開催された第3回日本情報国際会議でも、日英共同による報告をさせて頂いた。併せてお目通しいただければ幸いである。



# 英国の大学図書館による NACSIS-CAT 試用の状況

— 英国出張報告 —

学術情報センター教授

みやざわ あきら  
宮澤 彰

## 英国 CAT

学術情報センターでは英国図書館と協力して、英国図書館および英国の大学図書館の日本語部門で NACSIS-CAT を利用して目録作成を行なうパイロットプロジェクトを進めてきた（ニュース第13号にこのプロジェクト開始の経緯が報告されている）。このプロジェクトをセンター内では英国 CAT と呼び慣わしてきた（もちろん英国側では NACSIS 利用のプロジェクトといった呼び方であるが）。現在英国図書館、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学、シェフィールド大学、スターリング大学が参加しており、92年3月を一応の目途として活動してきた。

## 状況

英国の参加機関との接続はセンターから英国図書館までの回線と、英国図書館のネットワークおよび英国内の研究ネットワークである JANET を通じて行なわれた。しかし CAT システムの実際の利用という面では、利用者教育、接続のための技術的細部の調整などに時間がかかり、91年12月にやっと業務モードでの利用が可能な状況になった。

## 参加館会議

今回92年1月の英国出張は、英国側の参加館で定期的に行っている会議に出席して今後の進め方などを相談するために行ったものである。1月の20～24日の日程で、20～22日はケンブリッジ大学での技術的打ち合わせ、23日は英国図書館およびロンドン大学ユニバーシティカレッジを訪問しネットワーク関係の打ち合わせと調査、24日に英国図書館内で参加館会議であった。

ケンブリッジ大学での技術的打ち合わせでは、NACSIS-CAT のダウンロードデータから UK-MARC フォーマットへの変換など CAT システム利用の技術的細部を先方のシステム担当者との間で打ち合わせた。ネットワークに関しては接続ポイントの変更や将来のインターネット化などの調査を行なった。参加館会議では、3月に作成する報告書の内容、要員教育プログラム、プロジェクトの今後などについて討議した。今後については「業務利用のための試用」という新しいフェーズとして継続することが合意された（その後のやりとりで期間を94年3月までと設定）。

## CAT の海外利用

今回の出張で特に感じた点は、CAT システムの業務利用という点での問題点は日本でも英国でも本質的には変わらないということである。ただし、それに加え少数言語で要員も少ない（普通1大学1人）、当然機械化の知識もほとんどないというハンディキャップがある。こういった点のサポートをセンター側から行なうことによって、NACSIS-CAT を日本語資料の世界的な総合目録データベースとして育てていくことができるのではないかと考えている。

## 台湾の国際資訊発展新趨勢研討会に参加して

学術情報センター前副所長

おのきみお  
大野公男

1992年3月18日に、台北市で、中華民国科技館際合作協会（Sci-Tech Interlibrary Association, STICA）の年次総会が、行政院国家科学委員会科学技術資料中心（Science and Technology Center ; National Science Council, STIC）の主催で開催された。私は、STICの馬道行所長から「NACSISの紹介およびその海外サービスの可能性」と題して話をするようにとの招待を受け、台湾に出張したので、その報告をする。

今回のSTICAの年次総会は“Global Information Trends in the Year 2000”を大会スローガンとし、台湾大学応用力学会館で開かれた。参加者は台湾各地から約200人、その内直接図書館に関係している人を名簿から拾うと約100人（館長が多い）であった。外国から招待を受けた人は、ICSTIの会長であり同時にBIOSISの代表者である米国のH. E. Kennedy博士とその夫人、フランスからINIST所長のN. Dusoulier博士、ロシアの科学アカデミー極東支部部長のV. A. Markusova博士、Western Illinois大学のR. T. Chang教授（台湾出身）と私の6名であった。

会は、主催者馬博士の歓迎の辞、特別貴賓として出席の行政院国家科学委員会主任委員の夏漢民氏とKennedy博士の挨拶から始まり、Dusoulier博士、Markusova博士、私が午前中に、午後にChang教授、馬博士の講演が行われた。各講演が35分、討論が15分という割当てで、かなり活発な質疑応答があった。午前の質疑の半数以上が中国語であり、午後は講演も質疑も中国語で行われた。以下に講演題目を列記する：

“Information Systems and Services at INIST & Future Development of INIST's Information Management” (Dusoulier)

“Introduction of the Russian Academy of Sciences & Future Development of Information Management in the Russian Academy of Sciences (as an example Far East Branch RAS)” (Markusova)

“Introduction of NACSIS and Future Possibilities of Its Services Abroad” (Ohno)

“Networking and Resource Sharing : Vision and Reality” (Chang)

“Recent Development of the Major Information Networks and the Current Status of the Information Integration in Taiwan, Republic of China” (Ma)

各講演者は、予めかなり詳しい英文の原稿の提出が求められ、そのコピーが会場で配布された（これらのコピーは管理部に保管してある）。最後に約40分の総合討論の時間が設けられ、ECの情報網やNACSIS-CATに付いて、かなり多くの質疑があった。私の話では、書誌・所在データベースの共同作成の利点と成果を強調した心算であったが、力不足のせいもあって、今一つピンと来ない感じが参加者にあったかと思う。

この旅行では、STIC、国立中央図書館、新竹科学工業園区、清華大学、工業技術研究院の見学の機会が設けられた。STICはわが国のJICSTに相当する機関であるが、書誌



の作成も手がけていた。西文科技期刊連合目録（Union List of Non-Chinese Sci-Tech Serials in the ROC）は、1991年版（第19版）がもう立派な本になっていて、その迅速さに大いに感心したら、その後その分厚い目録がNACSISに届けられた（関心を寄せられる方は、内藤教授に連絡されたい）。国立中央図書館は、極めて広壯で美しい閲覧室を持つ。書誌の電算機への入力はこれからという段階だそうである。新竹科学工業園区は、台北から南へ車で約1時間半、台中との中間点に位置する。台湾の“Silicon Valley”を目指し、広さ約50ヘクタール、政府の投資により造成され、現在米国から40社が進出しているが、アジアからは3社に過ぎず、その内日本は1社のみと言う話だった。新竹工業園地に隣接して、清華大学がある。1911年北京に創設され、数奇な運命を辿って、1956年に核科学の大学院として再出発した。大学院に重点を置いた理工系の大学である。計算センターと図書館に案内されたが、遡及入力は完了、漢字の入力は部分から構成する方法を取っているが、鍵盤の操作は目にも止まらぬ早さであった。工業技術研究院は同じく新竹工業園地のごく近傍にある。開発した技術を政府、民間会社に販売している。1991年の収入は95億元（約470億円）で、うち6割以上が政府機関への、3割以上が民間への販売代金で、政府からの開発費援助は2億元に過ぎないとの説明を受けた。

この旅行は、私にとって初めての台湾訪問だった事でもあり、興味は尽きる事が無かった。台湾の面積は九州の90%より少ないが、外貨準備額は世界一である（但し相手を日本だけに限ると、貿易は輸入超過だそうだ）。活気のある社会が印象的であった。

終わりにになったが、歓待して下さった馬所長始めSTICの方々およびこの出張の機会を与えて下さった猪瀬所長に深い感謝の念を表すものである。

## 科学技術の先端に関する国連大学第2回国際シンポジウム：

## 科学技術への拡大アクセス——情報技術の役割——

学術情報センター研究開発部長

やま だ ひさ お  
山 田 尚 勇

国連大学および京都大学の組織による、招待講演者および若干のオブザーバーから成る標記の国際シンポジウムが、去る5月12-14日にわたり、京都市国際交流会館において開催された。

12日午前10時からの、京都大学荒木不二洋教授の司会によるオープニングセッションでは、デスーザ（Hector Gurgulino de Souza）国連大学学長と井村裕夫京大総長のあいさつで会議は開幕した。

その後3日間にわたる、5セッション（7部）と二つのパネル討論会のあらまきは以下のとおりであった。

セッション1：「科学と技術へのアクセスと情報革命」では、同じく荒木教授を座長として、イギリスのノーベル化学賞受賞者のJohn Kendrew博士が「人類の福祉としての科学へのアクセス」という概括講演を行ない、次いでアメリカ国家標準・技術局（NIST）のDavid Lide博士が「科学へのアクセスにおける情報技術のインパクト」と題する基調講演を行なった。

セッション2：「情報技術における経験」は2部から成り、第1部：「国際協力における経験と発展途上国」では国連関係においてフランスとアメリカで活躍しているJacques Tocatian博士が問題の「経験と方略の立ち上がった評価」について報告した。第2部：「技術的经验——情報資源とネットワーク」では、フランス科学技術情報局（INIST）のNatalie Dusoulier女史が「データベース」について、次いで日本のNTTインタフェース研究所の釜江尚彦博士が「通信ネットワーク」技術の現状と将来の詳細を話し、京都大学の原田勝助教授が「電子ライブラリー」を概観した。

会議第1日目の最後を飾ったパネル討論会1：「発展途上国から見た国際協力の成果と限界」は、上記トカティアン博士の司会のもとに、メキシコ自治大学のMargarita Almada de Ascencio博士（女性）、中国科学技術情報研究所（ISTIC）のLIAN Yachun氏、ザンビアの協同大学のMaurice Lundu博士、それにユネスコ・タイ事務局のDelia Torrijos女史の4名が、国際情報流通における南北格差問題の深刻化、先進国からの援助の利益ならびに地域的不整合性などについて強く訴えた。

夕刻のレセプションにおいては、西島安則京大前総長のあいさつのもと、日中に提示された問題について、人と人との触れ合いによる熱心な討論が尽きることなく展開された。

第2日目は、セッション3：「情報の検索と移転における新技術とメディア」に始まり、カリフォルニア大学のMichael Buckland博士の「「拡張検索の」の提供する可能性」、ロンドン市立大学のStephen E. Robertson教授の「情報検索：理論、実験、そして実務システム」、イリノイ大学のLinda C. Smith教授（女性）の「検索システムのコンピュータ

化フロントエンド」, イギリス・ラフボロ大学の James L. Alty 教授の「マルチメディア技術：設計のチャレンジ」といった, 検索技術の理論, 設計, 応用にわたる講演がなされた。

引き続き, セッション4:「情報への知的アクセス」の第1部では情報システムの使い勝手をよくするためのヒューマン・インタフェース関係の講演が集められ, ドイツのカッセル大学の Gunnar Johansen 博士の「模疑的人間機械系および自己学習ツール」, 続いてアメリカのサーチテクノロジー社の William B. Rouse 博士が「ユーザ系インタフェースの人間中心的设计」, ドイツ GMD (国立数理・情報研究所) の Norbert Streitz 博士の「人間による情報処理の認知科学的理論により対話型システムを設計する」, 最後に筑波大学の高橋三雄教授の「パーソナル・ハイパーメディア・システム」の4講演があった。

その後夕刻には富士通(株)による製品紹介を含む活動報告があった。その後から翌日正午ごろまで, 同社による各種製品の実演展示が別会場で行なわれ, 特に海外参加者の注目を集めていた。

第3日目はセッション4の第2部において, 京都大学の長尾真教授が「機械翻訳」の歴史と現状と将来展望を述べ, 次のカリフォルニア工科大学 Frederick B. Thompson 教授による「自然言語処理と“サブ言語”(Bozena Hensz Thompson 女史と共著)では言語の機械処理が困難な根本的理由と, それを解決する「サブ言語」の導入手法について講演があった。このセッションは電総研の大津展之博士の「実世界計算とフレキシブル・アクセス:通産省の新プログラム」と題する, 広い意味のパタン处理的計算インタフェース研究についての講演によって締めくくられた。

最後のセッション5:「新技術から新しい協力の形へ」では, 新技術の活用により, いかにして発展途上国の情報格差を救うかに関し, アメリカ George Mason 大学の Andrew P. Sage 教授の「情報技術開発のシステムマネジメント」, 次いで今年新設された国連大学マカオ国際ソフトウェア研究所 (UNUIST) の ZHOU Chaochen 教授の「発展途上国の科学技術へのアクセスにおける UNUIST の役割」, 最後にブルガリア科学アカデミー会員で, IFIP の会長の Blagovest H. Sendov 教授の「国際協力における情報技術の可能性」と, 主として情報管理者の立場からする三つの講演があった。

次いでプログラムは, パネル討論会2:「国際協力の新形態に向けて」となり, 国連大学のプロジェクト・コーディネーターとして, 世界を駆けまわって活躍をしている, ユーゴスラビアの Ines Wesley-Tanaskovic 博士(女性)の司会のもとに, オランダにある国連大学新技術研究所の Charles M. Cooper 博士 [セッション5の座長], アルゼンチンの国連工業開発機関 (UNIDO) の Carlos Correa 博士 [セッション2の座長], ベルリン科学センターの Meinolf Dierkes 教授 [セッション4第2部の座長], カナダの国際開発研究所 (IDRC) の Martha Stone 博士(女性) [セッション3の座長], それに私 [セッション4第1部の座長] の5名のパネリストの討論ののち, Roland J. Fuchs 国連大学副学長のあいさつで, 3日にわたるシンポジウムは閉会となった。

講演, 質疑応答, パネル討論の詳しい内容については, 今後整理を経て論文集として刊行されることになっているので, 今ここでは若干の個人的な感想を述べるに留める。

第1には, 本シンポジウムは, 大きく分けると, 情報政策・管理の責任を持った人たちと, 情報技術の研究者と, 二つの異なる立場の人たちの集まりであったということである。

その結果、話が噛み合っていないと思われることがままあった。同時に、それが二つの異なる立場の人たちお互いが、他の立場を認識し理解するのに大きく役立つ、大いに意義あるシンポジウムであったと評価できる。

第2に、世界各地における社会の情報化のすさまじさと、それに伴う南北格差が浮き彫りにされていたことである。同時に、先進諸国がそのギャップを埋めるべく、意図的積極的な努力をしている熱意が感じとられ、わが国としても、そうした努力にもっと国家的な取り組みをすべきことを痛感させられた。

第3には、たとえ有料化の必要はあるにしても、すべての情報サービスは公共図書館のサービスに似て、官公産民の区別なく、必要に応じ、要求に応じて供与されるべき性格のものであるという思想が、世界における公約数的概念として育ってきているということである。これは情報伝達に必須の「情報ハイウェイ」、たとえば研究者用高速通信システムの運営においても芽生えつつある思想であるように見てとれた。そうした世界の大勢に鑑み、わが国において多くの分野に見られるタテ割り機構や各種の過剰規制の存在は、すみやかな見なおしを必要とすることを感じさせた。最後に、今回のシンポジウムにも女性の活躍が目立ち、また観察として、講演および討論の内容には話者の文化的背景が強くにじみ出ているの感があった。具体的には、たとえばラテン系の話者の場合、どちらかというとな話が抽象的に走り、かつ理路整然としているのに対し、日本の場合には具体性が強く、かつ羅列的であるのが印象的であった。

結論として、この種のシンポジウムは、わが国が国際社会で真に開かれたメンバーとなるのに、大きな刺激となると思われる、主催者の労に対して深甚の感謝の念を表したい。

## 「 IRDAC Round Table on Scientific and Technical Information 」 参加報告

学術情報センター研究開発部長

やま だ ひさ お  
山 田 尚 勇

ヨーロッパ共同体（European Communities）のコミッション（Commission，政府に相当する）下の産業研究開発諮問委員会（Industrial R & D Advisory Committee, IRDAC）が主催する科学技術情報に関する会合（Round Table on Scientific and Technical Information）が今年の3月13日、IRDAC 会長（Chairman）の Yves Farge 博士を議長としてベルギーのブラッセルにおいて開かれ、筆者はアメリカ、フランス、日本から各1名ずつの招待講演者の1人として参加した。参加者はIRDAC から座長を含む3人と招待講演者3名のほか、ベルギー、デンマーク、フランス（5）、ドイツ（4）、ギリシア、アイルランド（2）、イタリア（5）、オランダ（5）、ポルトガル、スウェーデン、スイス、イギリス連合（6）、ヨーロッパ共同体コミッション（6）、その他1名の計

51名であった（カッコ内は複数出席者の数）。

会議は午前9時に始まり、上記フェージ博士（フランス）司会のもと、IRDACのあいさつに続き、山田が学情センターの紹介を中心とした日本のデータベースサービスの現状について、次にアメリカのイリノイ大学の総合科学研究所（Coordinated Science Lab）情報検索研究部（IR Research Lab）のウィリアムス（Martha E. Williams）教授（女性）が「アメリカにおける科学技術情報（STI in USA）」と題して、次にフランスのローン・アルプス研究所（Centre de Recherche Rhône-Alpes）ELF ATOCHEMの情報部長（Head of Info. Dept.）のFrancois Jakobiak氏が「ヨーロッパにおける科学技術情報市場」と題して、それぞれ講演を行なった。

午後にはいって、冒頭にコミッションのDG XIII / B（情報産業・市場局）長官のR. F. de Bruine氏が、ヨーロッパにおける情報産業の振興および高度情報サービス技術の普及などを目標とした、同局の指導するIMPACT 2プログラムの解説を行ない、次いで同局のMartin Littlejohn氏がヨーロッパの産業界で行なった、科学技術情報に関する聞き取り調査の結果について詳しい報告をした。

その後、約2時間半にわたり、出席者全員が参加しての質疑応答ならびに熱心な討論が展開され、最後に議長による15分の要約があり、1日の日程を終了した。

全日にわたる講演と討論とは、今後整理されたのち、刊行されることになっている。ここでは若干の私的印象を述べると、

- (1) ヨーロッパは今後の産業における情報流通の重要性に大きな関心を払っている
- (2) ヨーロッパのデータベース産業はアメリカに比べて大幅に格差があることは、今後すみやかに是正されるべきである
- (3) アジア、特に日本からの情報の今後における重要性は十分理解するものの、具体的に収集のシステムをどうするかについて、まだこれという方策はない
- (4) 各社の社内における情報システム、特にデータベースの整備に力を入れる必要がある、などの意見が目立った。

さらに、各社の中でのデータベース（DB）の整備については、日本などでは人から人へ直接伝えられているような種類の情報が、ヨーロッパでは正式のDBとして整備される必要があるとの意見が述べられていたのに異和感を覚えた。

これは一つには、日本ではいわゆる終身雇用制のため、(1) DB化しなくても情報が逸散する心配のあまりないこと、(2) 自分より力をつけた部下にポストを乗っ取られるようなことがまず起こらないので、たとえば上司が部下などに安心して情報を流していること、(3) 労働時間が長く、ひとの触れ合いによる情報の伝達に十分時間をかけていること、などがその原因の一端となっているようである。

DBの構築や種類が、こうした文化的背景によって影響されるものであることを改めて考えさせられたのは、この会議に参加したことによる一つの収穫であったと思える。

## 米国 AAS / CEAL 会議報告

学術情報センター教授

いの うえ ひとし  
井 上 如

### 1. AAS / CEAL

AAS / CEAL (= Association for Asian Studies, Inc. / Committee for East Asian Libraries) は、亞洲學會／東亞圖書館委員會と漢字表記される。AAS は、米国のアジア研究者を束ねる学会で、中国と内陸アジア、韓国、日本、南アジア、東南アジア、地域間問題等の6部門に大きく分かれる。CEAL は AAS の下部機構の一つで、中国語資料、日本語資料 (Subcommittee for Japanese Materials)、韓国語資料の三つの言語／地域別小委員会、資料組織 (収集した資料に対しいかに主題アクセスを施すかが主要な関心)、図書館向け諸技術 (EACC CODE に基づく漢字処理の諸システム、書誌ユティリティと図書館ネットワークが主たる関心)、刊行物 (年3回刊行のプレティンの編集) の課題別各小委員会、更に、事前の調査を必要とする CEAL Statistics と、CEAL Directory 編成のための二つのタスク・フォースから成る。UCLA EAST ASIAN LIBRARY の日本語部門のヘッドで、CEAL の日本語資料小委員会の委員長でもある旧知の三木さんから、AAS の年次大会に出席して NACSIS-CAT / IR の海外提供について話をするようにと以前から誘われていたのに今回応える機会を得た。去る4月2日から5日まで、ワシントンで標記学会の第44回年次大会 (約2,900名出席) が開かれた機会に、CEAL の諸会議も開かれた。出席した日本語資料小委員会から三つのトピックを選んで、以下に各論として紹介する。

### 2. NSF と NACSIS-IR

CEAL の日本語資料小委員会は、4月3日 (金) の18:30-22:30まで開かれた。前半は招待講演 (各自30分) で、SCAN C2C の Chairman of the Board の Tom Satoh 氏が “Japanese Technical Information-What’s out there, and how you can get it?” という題 (後述) で、また筆者は、“Provision and uses of NACSIS-CAT/IR in foreign countries” という題でそれぞれ話した。NACSIS の英文要覧と Newsletter No.5, NSF 作成の NACSIS から入手可能なデータベースのリスト、それに話のレジュメを添えて配布し、あらかじめ NSF の Acting Section Head for East Asia and Pacific Programs である Alexander P. De Angelis 氏から頂いたデータ (非常に役に立った) を踏まえて、海外提供のデータベースとその利用状況を中心に話した。日本語資料小委員会の参加者も、ワシントンに集まった機会に、一部有志の方々が筆者の話に先立って、NSF の NACSIS ROOM に NACSIS-IR 担当の L. E. Garfield さんを訊ねて検索サービスの現場を視察するなど、関心を示して下さった。質疑応答を含めた全体的な感想としては、NACSIS-IR のデータベースが、日本からの他のデータベース・サービス (科学・技術、ビジネス、特許などに特化している) に比べて利用者にとって特徴が掴みにくいこと、KAKEN と GAKKAI-1 など一部に利用が集中する一方で今後の新規運用のデータベースへの期待が大きいこと、米国各地からのオンライン・アクセスへの要望などが目だった。



### 3. 日本情報の BROKERAGE と使用言語

「日本から情報を提供すること」と「米国における日本情報ニーズに応えること」との間には、大きな溝があり、それを埋めるのが米国における日本情報の BROKERAGE というビジネスである。その溝がどのようなものであり、どのように埋められているか（いないか）を知るのに、TOM SATOH 氏の講演は参考になった。SCAN C2C という会社は、1985年に JAPAN TECHNICAL INFORMATION SERVICE という社名で設立され、最初は XEROX 社が、次いで Bell & Howell 社がオーナーであったが、1988年に Fuji-Xerox 他に身売りされ、社名も現在のものとなった。TOM SATOH 氏は終始一貫してその中心的な存在である。

アメリカ企業の日本情報需要が専門別に非常に特化したもの（例＝semiconductors ではなく gallium arsenide semiconductors）であって、そうした特化した需要に対応すること、特定テーマに関する文献のリストや抄録集だけでなく full text のデリバリーと直結したサービスであること、印刷物でなくオンライン・居ながら・アクセスであること、日本情報の需要は、一般的な市場調査は有効でなく、情報パッケージの販売とユーザ教育から得られる経験が大切である等が、『溝』とその『埋め方』の主要な内容である。

日本情報の BROKERAGE というビジネスを考える際に興味深いのは、日本情報の海外への提供につきものの英語（国際語）と日本語（vernacular）という対立が、翻訳に要する時間と経費に還元されるということである。言い替えれば、英語か日本語かという二者択一ではなく、ユーザ次第でどちらでも対応可能だということである。まず英語で簡単な知識を得て、更に詳しく知りたければいろいろメニューがある中に、翻訳もある。

このことは、言語の問題を日本側から見るのと米国側からみるのとで、違って見えるということでもある。この意味で、米国側の日本情報を必要としている各専門機関（それは必ずしも日本語コレクションではない）が、実際にどのように日本情報へのニーズを充たしているかを知る必要があるということ強く意識させた。

### 4. 三つのナショナル・プラン

CEAL の全体会議では、今年のテーマである resource sharing に関連して、ARL (Association of Research Libraries) のプロポーザルと、日本情報に関する三つの、相互に関連したナショナル・プラン策定グループの活動報告（一部は本誌前号に記載）がなされた。その三つとは：

- 1 Hoover Conference on National Planning for Japanese Libraries
- 2 National Planning Team for Academic Libraries
- 3 National Coordinating Committee for Japanese Library Resources

である。これらの各グループは、並行しているのではなく、1, 2, 3 の順序を追って発展してきた。今度の全体会議では、その経過を踏まえたレビューと、これからの展望を開くための討論がなされた。

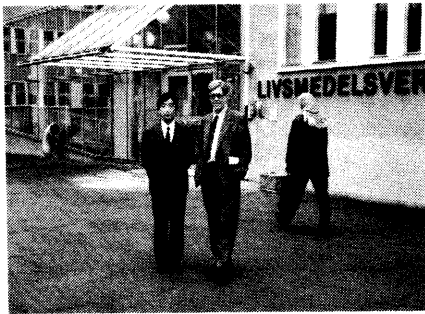
ARL はかつて、今後の米国のアカデミック・ライブラリが発展し行くべき方向を四つのシナリオで示したことがある。これが一部の大学図書館の将来計画で採用され、実績を積んだ余勢を駆って、1990年代の東アジア資料の収集について、これらのシナリオが応用可能であるとして提案を行った。具体的な検討は今後のことなので、会議の後 ARL を訪れて質問をした。これらの詳細は別の機会に述べたい。

## フード・ネットワークとストックホルム大学図書館の接続相談

学術情報センター教授

ないとう えいすけ  
内藤 衛 亮

1992年3月にスウェーデンのウプサラにある国家食糧庁（Statens Livsmedelsverket）を訪れて、農学、農業情報のネットワーク構築プロジェクトについての聞き取り調査をおこなった。これは偶然にも1989年度から3年間の計画ですすめられた文部省科学研究費国際学術研究「学術情報システムの国際化に関わる海外学術情報流通調査」（研究代表者：井上如教授）の最後の訪問調査となった。



スウェーデン国家食糧庁の研究開発部長であるベンクト・ホフステン（Bengt Hofsten）教授は、1991年11月にストックホルムにおいて「フード・ネットワーク」会議を開催した。これは電子掲示板スタイルの論文提出によって、参加者は会議開催のはるか以前から内容を知り、著者は随時、書き込みを行うことを意図したもので、論文提出の方法も電子メール、フロッピー・ディスク、やむなくば紙という手段を用意したものであった。

論文募集と会議開催の広告は一年以上も前から着手していた模様であるが、日本からの反応がなく、学術情報センターの概要と日本の食糧関係のデータベースを紹介してほしいというファクスが来たのは91年5月であった。センターでは農学・農業情報については本格的な取り組みは未着手であり、そこで、わが国の中核的組織である「農林水産技術会議」や「農学図書館協会」の存在と活動内容、JICST データベースにおける食糧（“FOOD”と“NUTRITION”）関係の論文で、出版国が日本であるもの、その日本語・英語の内訳などについてわずか4ページの記事に白山邦彦氏（JICST）と共著のかたちでまとめることにした。論文メ切は10月15日であったが、当然のこととして遅れ、10月すえにビジネス・メールでフロッピーを送りだした。おいかえし論文集（A6版）が送られてきて、会議に参加する以前に肉眼でも読める状態になっていた。会議運営の効率と実行力がしのばれてホフステン教授の人柄と専門に興味があったが、その時点ではスウェーデンははるかかなたの国であり、先生に会えるとは夢にも思わなかった。幸運にも国際学術調査という機会に恵まれて先生にお目にかかることができたばかりか、同行の坂直史共同利用課長ともど

もウプサラ駅前にある先生のアパートに「ホームステイ」させていただいた。今回の訪問調査では先生の推進した「フード・ネットワーク」のその後についてと、スウェーデンの図書館ネットワークでは「料金」問題をどのように扱っているのかについて聞き取ることが課題であった。

「フード・ネットワーク」は、農学関係の世界的なネットワークに AGRIS があるものの、研究者同志の直接的なコミュニケーションとしての機能は備えていないこと、主題内容の特性として南北問題があり、南の情報への北からの需要と南からの情報利用要求を具体的に満たすという課題や、さらには、急転回した（対岸の）ソ連・東欧からの情報利用要求や食糧事情の情報要求などに、電子メールや電子掲示板を活用しようとするものである。また、フロッピーディスクによる配布によって、電線なしにパソコンだけで読めるようにしてアジア・アフリカの「山奥」でも最新情報に近づけることを意図している。帰りに際にテスト版のフロッピーをいただいた。J3100 に読ませて実際に動くことを確認したので国内的な提供方法を検討しなければならない。いまのところオクスフォード・コンピュータ・ジャーナル社（英国）がフロッピー版の作成と提供を担当すること、92年春には配布可能となること、第三世界には廉価もしくは無料で、先進国には相応の価格で提供したいとのことであったが、具体的な価格設定にまでは至っていない。

スウェーデンの図書館ネットワークは王立図書館の BIBSAM が運営する LIBRIS が知られている。国内の研究（大学）図書館、専門図書館がすべて参加しており、入力館は70以上で、「料金」は、国（つまりは王立図書館）の予算が1/3、リターン・キーの回数を根拠として参加館が2/3を拠出しているとのことである。参加館は事実上すべて国立もしくは公立であるため、商用データベースでいう料金とは違うというのが、BIBSAMの部長であるシェル・ニールソン氏の説明であった。同氏は BIBSAM がスウェーデンにおける ISO / TC46 のとりまとめ役であることから、TC46 の会合で顔を合わせたことはあったし、アドバイザー・コミティで穏やかなまとめる方向の発言をする人柄であることは承知していたが、直接、話をしたことはこれが初めてであった。

ノルディック諸国における最近の話題としては相互貸借の費用分担問題があり、サービスの有料化（郵送料）は必至とのことであった。デンマークではすでに実施済み、フィンランドが92年春に導入の予定、スウェーデンは向こう2年の調査期間中とのことであった。単価を設定するにしても図書館の規模や利用量の大小によってそれぞれのコストは違うとの見解にたち、コスト・スタディが進行中の模様であった。

ウプサラにある国立農業大学図書館のほか、ストックホルム大学図書館を訪問した。エルスケンの設計した建物で、入口にコーヒーショップがあり、学生の流れを生み出すしかけに感嘆した。カントウェル課長ほか丁寧な日本語を話すフランソーン氏、ユー氏など EAJRS の出席者がセンターの根岸・安達先生を懐かしみ、英国におけるパイロット・プロジェクトを前提に「接続相談」を始めたのには閉口した。昭和63、4年に数多くの接続相談に立ち会ったが、まさかストックホルムでそれが始まるとは思わなかった。坂課長にとっても利用資格と設備投資の内容、回線の種類などについて接続相談にありがちな錯綜した、しかも英語、日本語いりまじりの会話にまきこまれて、海外からの期待と必然性を実見できた経験であった。館長が乗り出してきて昼食会におよばれた。あわせて、ホームステイというかたちで異文化体験の機会を下さったホフステン教授に御礼申し上げる。

## 『木簡データベース』のサービス開始

このたび、奈良国立文化財研究所の協力を得て、同研究所が作成する『木簡データベース』の提供を受け、NACSIS-IRによるサービスを平成4年6月1日から開始しました。

## 1. 概要

## (1) 収録対象

## ① 収録対象

全国各地の遺跡から発掘される木簡を整理し、報告書等の形で記録されたもの

## ② 収録件数

サービス開始時のデータ件数は約13,500件、毎年更新の予定

## (2) 収録データ項目

木簡記載内容（釈文、年月日、地名、人名）、出土遺跡名、木簡の形態、報告書等の名称、内容分類等

## 2. 利用方法

データベース呼び出しコマンドは「MOKKAN」です。内容及び利用方法等については、「NACSIS-IR データベースシート（木簡データベース）」を御覧下さい。データベースシートを御希望の方は、①送付先の郵便番号、住所、氏名、②利用者番号、③御希望のデータベースシート名を明記の上、FAX（03-3814-4931 共同利用係宛）でお申し込み下さい。

## 3. 利用料金

データベースを呼び出す都度 …… 30円/回

なお、利用に係る経費は、各データベースの利用額の月ごとの合計額にその3%を加算した額となります。（データベース課）

原稿番号:	008112
木簡番号:	004181
型式番号:	6081
遺跡名:	平城宮
地区名:	6AAICJ59
発掘次数:	32*
遺構番号:	SD4100
内容分類:	【 M 】 文書
年月日:	年 月 2 日
形状:	上欠左欠右欠
樹種:	【 S 】 杉
木取り:	【 I 】 板目?
寸法:	高さ:(272) 幅:(59) 奥行:6
写真番号:	70-C-3533, 3534, 3535, 3536, 3537, 3538
出典:	【 平 4 】 平城宮木簡 四
年号:	□月 2 日
国郡郷里:	丹波国・近江国・能登国・出雲国意宇郡・(伊予国)宇和郡
人名:	羽咋□・県主・多々良忠人・多々良起人・多々良大成・八波益人・□木量 □・□三百麻呂・□上石□・意宇・頼田
釈文:	*【一部移丹波国\←□(聖カ)白丁羽咋□\←一位近江国興□(主カ)\ □□人\○多々良忠人\○多々良起人\○多々良大成位\○八波益人位\ ○巴上四人□(周カ)\○□木量□\○三百麻呂\○上石□\ *【□十八□□□□□□(聖カ)意宇\月二日□□\広○\□麓\郡 主候\宇和\○□□\ ( ) 位子頼田\○□□□\○□□\○□□□ □

## 『RAMBIOS』（仮称）のサービス開始

分子生物科学分野のレビュー文献の索引を収録した『RAMBIOS』（仮称）のサービスを行うことになりましたので、その概要等をお知らせします。

### 1. 概要

#### (1) 収録対象

##### ① 収録対象

主要な分子生物科学関係の学術雑誌86誌（欧文誌70，和文誌16）

##### ② 収録範囲，収録件数

1986年以降のデータを収録，サービス開始時点の件数は約4,500件  
年間増加件数は約1,000件

#### (2) 収録データ項目

標題，著者名，掲載雑誌名，巻号，ページ，性格語等

#### (3) その他

本データベースは，RAMBIOS 刊行会が作成したデータベースを同刊行会の協力を得て，サービスに提供するものです。

### 2. サービス開始時期

平成4年7月を目処に準備を進めています。データベースの内容及び利用方法等については，サービス開始時に発行予定の「NACSIS-IR データベースシート（RAMBIOS）」（仮称）をご覧ください。

具体的日程が決まり次第，利用方法等についてオンラインニュース等でお知らせします。

### 3. 利用料金

データベースを呼び出す都度 …… 30円/回

なお，利用に係る経費は，各データベースの利用額の月ごとの合計額にその3%を加算した額となります。

（データベース課）

```

CNTN:1109001 CLAS:BRIEF REVIEW
TITL:Secretory products of macrophages and their physiological functions
AUTH:Werb,Zena
AUTH:Takemura,Reiko
AFFN:Lab. of Radiobiology and Environmental Health, Univ. of California,
      San Francisco, CA 94143, USA
ISSN:0002-9513
JRLN:AM J PHYSIOL VOL1:246(1) PAGE:C1-C9 YEAR:1984
LANG:ENG
NREF: 79
KYWD:MACROPHAGE
KYWD:MACROPHAGE DERIVED PRODUCT
KYWD:BIOLOGICALLY ACTIVE SUBSTANCE
KYWD:INFLAMMATION
KYWD:IMMUNOREGULATION
KYWD:PROTEIN SECRETION
KYWD:MONOCYTE
KYWD:PROTEOLYSIS
KYWD:LIPID METABOLISM
KYWD:TISSUE REPAIR
  
```

## NACSIS 利用の手引（第2版）の発行

「NACSIS 利用の手引（第2版）」は、情報検索サービス及び電子メールサービスの内容についての概要、利用に関する諸手続き及び各サービスの利用の方法等を説明したものです。

情報検索サービス及び国際電子メールサービスの利用状況（料金の請求明細）を表示するコマンド及び電子メールサービスの **MMAIL**, **MMAILS** コマンド（詳細は次記事参照）の提供開始に伴い、このたび第2版を作成しました。

平成4年度に新規に利用申請される方にはお送りしておりますが、継続利用されている方でご希望の方は、①送付先の郵便番号、住所、氏名、②利用者番号を記載するとともに「利用の手引（第2版）希望」と明記の上、FAX（03-3814-4931共同利用係宛）にてご請求ください。

（共同利用係）

## 電子メールサービス（NACSIS-MAIL）のコマンド機能向上と「利用者マニュアル（第3版）」発行のお知らせ

平成4年6月1日から、電子メールサービス（NACSIS-MAIL）における、これまでの **MMAIL**, **MMAILS** コマンドの機能を向上させた新しい **MMAIL**, **MMAILS** コマンドの提供を開始しました。機能向上内容の概要は電子掲示板「NACSIS」に掲載していますので参照されることをお勧めします。

また、新しい **MMAIL**, **MMAILS** コマンドの使い方を説明した「電子メールシステム利用者マニュアル（第3版）」を新しい機能の提供開始に合わせて発行しました。

「電子メールシステム利用者マニュアル（第3版）」は、平成4年度に新規の利用申請された方には利用承認とともにお送りしておりますが、継続利用されている方については、ご希望の場合にお送りしますので、「NACSIS 利用の手引（第2版）」と同様の方法でご請求ください（「NACSIS 利用の手引（第2版）」もご希望の方は併せてご請求くださるようお願いいたします。）

なお、電子メールサービスの開始以来利用していただいている **SIMAIL** コマンドも当面は従来どおり利用できますが、平成5年3月末をもって廃止し **MMAIL**, **MMAILS** のみとする予定ですので、**SIMAIL** コマンドをご利用の方は、新しい機能の **MMAIL**, **MMAILS** コマンドを利用していただくようお願いいたします。

（システム管理係）

## 「NACSIS-IR 総合マニュアル（改訂版）」の刊行

現在、利用いただいております「NACSIS-IR 総合マニュアル」（学術情報事務研究会編 平成3年3月刊行）は、既に品切れとなり、ユーザーの皆様にご不便をおかけしておりましたが、この度、更に内容を充実した改訂版が刊行されましたので御案内いたします。購入にあたりましては、下記販売代理店において取り扱われておりますのでお問い合わせ下さい。

なお、改訂された主な内容は、新たにサービスを開始したデータベースの概要解説が追加されたほか、データの収録状況やサービス時間の延長など最新情報を取り入れたものとなっています。

### 〈総合マニュアル改訂版の内容〉

#### (1) 基本編

#### (2) データベース編

##### 〈新たに追加されたデータベース〉

- ① 経済学文献索引データベース
- ② 維新史料綱要データベース
- ③ 雑誌記事索引データベース
- ④ 国会図書館科学技術欧文会議録データベース
- ⑤ 民間助成研究成果概要データベース
- ⑥ 家政学文献索引データベース

#### (3) コマンド編

##### 〈新たに追加されたコマンド〉

CHARGE コマンド

- (4) 接続編
- (5) メーカー編
- (6) 付録
- (7) 索引

編集者：学術情報事務研究会

発行者：財団法人 電気・電子情報学術振興財団

大きさ：A4判 約500p

価 格：7,000円（税込み）

販売代理店：丸善株式会社

〒103 東京都中央区日本橋2-3-10

☎ 03(3272)7211(代表)

株式会社紀伊國屋書店

〒163 東京都新宿区新宿3-17-7

☎ 03(3354)0131(代表)

### 〈関連サービス〉補遺版の提供について

本マニュアルを購入された方で、今後の新規サービスデータベースに係る補遺版を希望される方には、発行者より補遺版が提供されます。但し、補遺版の提供は本マニュアルの次回改訂までの間となり、送料は希望者の実費負担となります。その詳しいサービス案内・請求方法等については補遺版作成の都度、「NACSIS-IR NEWS」等によりお知らせします。

## 学術情報ネットワーク（パケット交換網）加入機関

### 1. 加入の推移

〔各年度における設置形態別接続機関数〕

（平成4年3月末現在）

年 度	国立大学	公立大学	放送大学	私立大学	短期大学	共同利用	計
昭和61年度	4	0	0	0	0	1	5
昭和62年度	12	0	0	0	0	0	12
昭和63年度	19	0	0	4	0	6	29
平成元年度	23	4	0	28	0	6	61
平成2年度	13	2	1	18	0	1	35
平成3年度	6	2	—	27	3	0	38
合 計	77	8	1	77	3	14	180

〔各年度における仮想ネットワーク別接続回線等数〕

（平成4年3月末現在）

年 度	接続 回線数	仮想ネットワーク別接続端末等数									
		N-1	図書館	G4 FAX	SIMAIL	JAIN	HEP	UMIN	STEP	地震	その他
昭和61年度	8	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0
昭和62年度	26	12	12	7	0	1	0	0	0	0	0
昭和63年度	53	30	23	3	0	7	4	1	4	0	0
平成元年度	118	45	43	16	5	6	11	8	1	0	1
平成2年度	96	32	26	7	2	14	7	8	5	4	4
平成3年度	86	38	30	0	1	18	0	7	3	3	3
合 計	387	161	138	33	8	46	22	24	13	7	8

注) 内訳の名称は、学術情報ネットワークを利用した下記に示す仮想ネットワークの名称であり、仮称のものも含む。

N-1 : 大学間コンピュータネットワーク

図書館 : 図書館ネットワーク

G4 FAX : ファクシミリ用ネットワーク

SIMAIL : 大学間電子メールネットワーク

JAIN : LAN間接続実験ネットワーク

HEP : 高エネルギー物理学研究用ネットワーク

UMIN : 医療情報ネットワーク

STEP : 宇宙地球理学ネットワーク

地震 : 地震研究ネットワーク



## NACSIS-IR システム・データベース収納状況 (1/2)

平成4年5月8日現在

No	データベース名称	収納件数	収録期間
1	科学研究費補助金 研究成果概要データベース	74,685	昭和60年度～
2	学位論文索引データベース	56,547	昭和59年度～
3	学会発表データベース第一系 (電気・情報・制御関連)	58,875	昭和62年3月～
4	学会発表データベース第二系 (化学関連)	16,155	昭和63年5月～
5	学会発表データベース第三系 (建築・土木・造園関連)	12,366	平成2年10月～
6	学会発表データベース第四系 (生物学・農学関連)	731	平成2年3月～
7	学会発表データベース第六系 (工学関連)	231	平成2年1月～
8	学会発表データベース第七系 (医学関連)	683	平成2年度～
9	学会発表データベース第八系 (人文・社会科学関連)	133	平成2年6月～
10	学術論文データベース第一系(全文) (電子関連)	456 1,976	平成元年度～
11	学術論文データベース第二系 (化学関連)	5,917	昭和58年1月～
12	海外研究プロジェクト データベース	80,972	平成4年1月末現在
13	民間助成研究成果概要データベース	665	昭和46年度～
14	経済学文献索引データベース	63,011	昭和58年4月～
15	雑誌記事索引データベース	832,190	1984年1月～
16	現行法令データベース	3,600	平成3年9月末現在
17	維新史料綱要データベース	18,285	
18	研究者ディレクトリ	130,109	昭和63年5月現在
19	データベース・ディレクトリ	1,170	平成2年4月現在
20	家政学文献索引データベース	19,751	1979年4月～
21	Life Sciences Collection	1,024,037	1982年1月～
22	MathSci	811,282	1973年1月～
23	COMPENDEX PLUS	2,364,856	1976年1月～
24	Harvard Business Review	2,574	1927年1月～

## NACSIS-IR システム・データベース収納状況 (2/2)

No.	データベース名称	収納件数	収録期間
25	ISTP & B	1,784,667	1982年1月～
26	EMBASE	2,345,539	1984年4月～
27	SciSearch	3,615,590	1987年4月～
28	Social SciSearch	624,631	1987年4月～
57	A & H Search	566,975	1987年4月～
30	目録所在情報データベース (和図書)	613,260 4,158,652	
31	目録所在情報データベース (洋図書)	1,216,877 2,709,891	
32	目録所在情報データベース (和雑誌)	72,627 1,493,939	
33	目録所在情報データベース (洋雑誌)	111,159 904,004	
34	科学技術関係欧文会議録 データベース	27,815	昭和60年4月～
35	アメリカン・センター図書館 総合目録データベース	6,320	平成元年12月末現在
36	JPMARC	1,082,007	1969年1月～
37	LCMARC(Books)	3,219,629	1968年1月～
38	LCMARC(Serials)	528,937	1973年1月～

(注) No.30～33のデータベースの上段は書誌件数、下段は所蔵件数。

(システム業務係)

## 接続ニュース

前号以降、新たに目録所在情報サービスの参加機関となった図書館は、以下のとおりです。

(平成4年5月末現在)

No.	機関名	接続日	No.	機関名	接続日
187	西東京科学大学	4.3.5	193	甲南女子大学	4.4.1
188	神戸学院大学	4.3.6	194	京都府立医科大学	4.4.7
189	フェリス女学院大学	4.3.11	195	青山学院女子短期大学	4.4.24
190	流通経済大学	4.3.17	196	愛知学泉大学	4.5.8
191	岡崎国立共同研究機構	4.3.25	197	東北福祉大学	4.5.13
192	鈴鹿医療科学技術大学	4.3.25	198		

この結果、参加機関数は、国立大学95、公立大学10、私立大学81、共同利用機関8、短期大学1、その他2、合計197となりました。

(共同利用係)

## NACSIS-CAT システム・データベース

平成4年5月8日現在

データベース名称		収納件数	備考(収録期間等)	
総合 目録 デー タベ ース	和 図 書	書 誌	613,820	
		所 蔵	4,162,445	
	洋 図 書	書 誌	811,128	
		書 誌 ( 遡 及 )	406,547	
	和 雑 誌	所 蔵	2,712,833	
		書 誌	73,072	
	洋 雑 誌	所 蔵	1,499,595	
		書 誌	111,636	
	著 者 名 典 拠	所 蔵	907,065	
	統 一 書 名 典 拠		553,690	
和 雑 誌 変 遷 マ ッ プ		1,560		
洋 雑 誌 変 遷 マ ッ プ		8,535		
参 照 フ ァ イ ル	L C / M A R C	洋 図 書 書 誌	3,865,260	1968年1月～1992年4月
		洋 雑 誌 書 誌	528,937	1973年1月～1992年3月
		非 文 字 書 誌	150,129	1973年1月～1991年3月
		洋 書 著 者 名 典 拠	2,411,393	1977年1月～1992年4月
		洋 書 統 一 書 名 典 拠	13,836	1977年1月～1992年4月
	J P / M A R C	和 図 書 書 誌	1,084,524	1969年1月～1992年5月
		和 雑 誌 書 誌	82,181	1968年8月～1992年3月
		和 書 著 者 名 典 拠	26,288	
	U K / M A R C	洋 図 書 書 誌	1,236,521	1950年1月～1992年4月
	T R C / M A R C	和 図 書 書 誌	272,325	1985年4月～1992年4月
G P O / M A R C	洋 図 書 書 誌	281,068	1976年1月～1991年12月	

(システム業務係)

## 目録所在情報サービス利用説明会の開催

短期大学及び高等専門学校を中心とした未接続図書館に目録所在情報サービスの概要や接続方法を理解していただくため、標記説明会を実施しておりますが、引き続き第4回から第6回までの募集をいたしますのでご案内します。

- (1) おもな内容  
 ①学術情報センターの概要, ②目録所在情報サービスの概要と利用方法  
 ③学術情報センターとの接続方法, ④利用申請方法, ⑤質疑応答, 個別相談
- (2) 開催日時 (時間: 各回とも 14:00から16:30)  
 第4回 9月18日(金) 第5回 10月23日(金) 第6回 11月20日(金)
- (3) 受付期間  
 8月3日(月)から8月14日(金)

なお、今回より受入れは各回先着12機関とさせていただきますので、希望日を電話(03-3942-6933共同利用係)で予約(確認)のうえ、「目録所在情報サービス利用説明会参加」と明記し、①機関名、②機関の郵便番号及び住所、③参加者の職名及び氏名(3名以内)、④連絡先の電話番号、⑤予約日を記入しFAX(03-3814-4931共同利用係宛)にて申し込みください。

(共同利用係)

## 海外実務担当者研修報告

——台湾師範大学図書館一行および英国CAT参加機関の担当者——

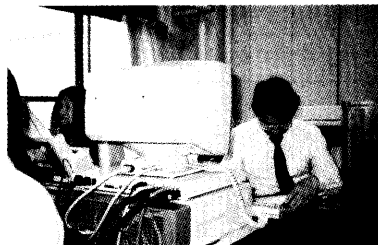
去る5月11日から13日までの3日間、台湾師範大学図書館から6名の館員が参加して、当センターが提供するサービスに関する海外実務担当者研修を実施し、ネットワーク、目録、データベースの講義及び関連するデモンストレーションを行った。

また、英国よりパイロットプロジェクト参加機関の担当者を迎え、5月18日から29日の2週間に亙り、第1回目録システム講習会への参加を含む目録の研修を行った。



台湾師範大学  
図書館一行

ケンブリッジ大  
小山氏  
オックスフォード大  
Tytler氏



## 学術情報センターシンポジウムなどの開催予定

平成4年度の学術情報センターシンポジウムは、10月13日に京都市（会場は京都大学）で開催しますのでお知らせします。

また、科学研究費国際共同研究「日本情報および東アジア文字による学術データベースの国際交換に関する研究」の公開講演会を、『学術情報の国際流通と標準化』をテーマに11月20日、東京（会場は国立国会図書館）で開催しますので併せてお知らせいたします。

公開講演会は、学術情報の生産と流通に対する標準化活動の現状について、招聘専門家による国際的な標準化の取組や各国の国内状況の報告を中心に行う予定です。図書館職員をはじめ、コンピュータセンター職員、標準化関係者、情報産業関係者など多方面の方々にご参加いただける講演会にしたいと考えています。

なお、学術情報センターシンポジウムにつきましては、例年、東京および関西地区で各1回開催してきましたが、すでに関係機関には文書でご案内しておりますとおり、本年度は新たに学術講演会を7月6日に東京で開催することとしていることもあり、本年度のシンポジウムは関西地区のみの開催とさせていただきます。

内容、日程、申込方法等につきましては、詳細が決定次第、文書やBBSなどでおってご案内します。（研究協力係、研修係）

## 平成4年度 NACSIS-IR 講習（総合コース）の追加

NACSIS-IR 講習（総合コース）が次の要領で追加されました。

共 催 大 学	期 間	定 員
金沢大学	4.10. 8~10. 9	24名

NACSIS-IR 講習（総合コース）は大学とセンターとの共催で行う講習会で、本年度は金沢大学を含め4大学で開催の予定です。

なお、鹿児島大学での講習会は現在日程等を調整中です。

## 平成4年度目録システム講習会（地域講習会）の変更

目録システム講習会（地域講習会）の鹿児島大学開催については、システムの入替えのため、日程等が下記のとおり変更になりました。

日 程	定 員	他機関からの受入	申込〆切日
4.11.30~12. 4	12人	8人	10.16

### センターニュース No. 19 の訂正とお詫び

前号の下記の箇所に誤りがありましたことを謹んでお詫びするとともに、訂正させていただきます。

		誤	正
p. 39	研修等修了者数累計	目録システム講習会のH3の人数 3 4 5	3 7 3
		目録システム講習会の累計の人数 1 7 4 7	1 7 7 5
p. 43	平成4年度研修等日程表	IR北海道大の日程 6.11~12	7.9 ~10
p. 44	研修等への参加手続	1. 手続の流れ（参加手続）の上図の番号	⑥ ④ ⑦ ⑤

## 学術情報センター刊行物一覧

平成2年4月～4年3月

誌名	発行日／発行頻度
<b>センターの総括的出版物</b>	
学術情報センター年報 平成元年度, 平成2年度	年刊
学術情報センター要覧 和文版 平成2年度, 平成3年度	年刊
学術情報センター要覧 英文版 1990, 1991	年刊
学術情報センターニュース 12～19号	季刊
NACSIS newsletter No.3～No.5	年2刊
<b>研究報告</b>	
学術情報センター紀要 第3号	'90. 9. 30
学術情報センター紀要 第4号	'91.12.25
東アジア学術情報交流の高度化に向けて 第1巻 (1989年度)	'91. 3. 30
東アジア学術情報交流の高度化に向けて 第2巻 (1990年度)	'91. 6. 25
東アジア学術情報交流の高度化に向けて 第3巻 (1991年度)	'92. 3
韓国目録規則 3.1版 日本語訳 未定稿	'90.10
韓国文献自動化目録法記述規則日本語訳	'92. 3
東アジア文字データの国際交流に関する実証研究	'92. 3
学術情報システムの国際化に係わる海外学術情報流通調査	'92. 3
平成2年度 学術情報データベース実態調査報告書	'90.11.19
平成3年度 学術情報データベース実態調査報告書	'91.11.25
<b>講習会テキスト等</b>	
目録システム講習会テキスト 1991年4月改訂	'91. 4
目録システム講習会テキスト 1992年4月改訂	'92. 4
オンライン・システムニュースレター No.24～No.33	年6刊
<b>個別サービスに関する広報</b>	
NACSIS 利用の手引 (情報検索・電子メール) －概要／申請手続き編－	'90.10. 1
NACSIS 利用の手引 (情報検索・電子メール) －概要／申請手続き編－ 第2版	'92. 3. 31
目録所在情報サービス利用の手引 改訂版	'90. 7. 31
学術情報ネットワーク加入の手引き	'91. 2. 22
目録システム利用マニュアル 検索編 第3版	'92. 3. 31
電子メールシステム利用者マニュアル 第2版	'90.10
学術情報センター ILL システム操作マニュアル	'92. 3. 16
NACSIS-I R データベースシート 30種	
<b>学術雑誌総合目録等</b>	
学術雑誌総合目録〔欧文編〕誌名変遷マップ	'91. 3. 18
学術雑誌総合目録〔和文編〕1991年版 V. 1－7	'92. 3. 26

学術情報センター参与・評議員・運営協議員・委員会委員名簿

氏名	所 属	氏名	所 属
参 与		評 議 員	
秋山 龍	日本空港ビルデング株式会社相談役	阿南 功一	前筑波大学長
天城 勲	文部省顧問	有馬 朗人	東京大学長
井内慶次郎	東京国立博物館長	稲田 献一	大阪大学名誉教授
植之原道行	日本電気株式会社特別顧問	大嶋 仁	日本学術振興会理事長
岡本 道雄	財団法人国際高等研究所所長	大野 公男	北海道情報大学教授
小口 文一	株式会社富士通研究所相談役	岡村 總吾	東京電気大学長
加藤木理勝	国立国会図書館長	木田 宏	日本学術振興会顧問
越田 保	三井物産株式会社顧問	小山 宙丸	早稲田大学総長
津田 良成	愛知淑徳大学文学部教授	小山 弘志	国文学研究資料館館長
中村 守孝	日本科学技術情報センター理事長	佐野 博敏	東京都立大学総長
野村 忠夫	財団法人放送文化基金前顧問	清水 司	日本私学振興財団理事長
福村 晃夫	中京大学情報科学部長	末松 安晴	東京工業大学長
松永 英	国立遺伝学研究所名誉教授	長倉 三郎	総合研究大学院大学長
渡邊 龍雄	財団法人データベース振興センター専務理事	西島 安則	京都大学名誉教授
渡辺 宏	日立マクセル株式会社代表取締役社長	野坂 邦史	国際電信電話株式会社副社長
	(五十音順)	藤澤 益夫	慶應義塾大学常任理事
		松田 達郎	国立極地研究所名誉教授
		松山 公一	九州東海大学長
		宮津純一郎	日本電信電話株式会社常務取締役
		森 亘	科学技術会議議員
			(五十音順)
運 営 協 議 員		ネ ッ ト ワ ー ク 委 員 会	
安達 勤	筑波大学構造工学系教授	安藤 和昭	筑波大学学術情報処理センター長
市川 惇信	国立環境研究所長	荻田 幸雄	高エネルギー物理学研究所データ処理センター助教授
岡田 茂弘	国立歴史民俗博物館考古研究部長	北川 一	豊田工業大学制御情報工学科教授
開原 成允	東京大学医学部教授	清水 忠雄	東京大学附属図書館長
黒田 晴雄	東京理科大学教授	金澤 正憲	京都大学大型電子計算機センター助教授
後藤 英一	神奈川大学理学部教授	長谷川利治	京都大学大型電子計算機センター長
佐々木高明	国立民族学博物館副館長	林 英輔	山梨大学工学部教授
鹽野 宏	成蹊大学法学部教授	安永 尚志	国文学研究資料館研究情報部教授
清水 龍瑩	慶應義塾大学商学部教授	松方 純	宇宙科学研究所宇宙科学資料解析センター助教授
手塚 晃	金沢工業大学客員教授	青木 和晴	NTT通信網総合研究所長
宮川 公男	一橋大学附属図書館長	森 瑞穂	東京理科大学情報処理センター長補佐
山本 毅雄	図書館情報大学教授	山田 尚勇	学術情報センター研究開発部長
西田 龍雄	学術情報センター副所長	瀧田 喬	学術情報センター研究主幹
山田 尚勇	学術情報センター研究開発部長	浅野正一郎	学術情報センター教授
井上 如	学術情報センター研究主幹	橋爪 宏達	学術情報センター助教授
瀧田 喬	学術情報センター研究主幹	飯田 記子	学術情報センター助教授
内藤 衛亮	学術情報センター教授	雨森 弘行	学術情報センター事業部長
根岸 正光	学術情報センター教授		
浅野正一郎	学術情報センター教授		
宮澤 彰	学術情報センター教授		
	(五十音順)		

氏名	所 属	氏名	所 属
データベース委員会		総合目録委員会	
安藤 和昭	筑波大学学術情報処理センター長	浅野 次郎	東京大学附属図書館事務部長
飯高 洋一	西東京科学大学理工学部教授	上田 修一	慶應義塾大学文学部教授
大野 公男	北海道情報大学教授	澁川 雅俊	慶應義塾大学研究教育情報センター本部事務室長
開原 成允	東京大学医学部教授	武川 栄一	東京工業大学附属図書館事務部長
熊本 芳朗	電気通信大学総合情報処理センター長	玉利 幸雄	東京都立大学附属図書館事務長
小山 健夫	東京大学大型計算機センター長	鶴田 真也	国立国会図書館収集部資料調整室長
清水 忠雄	東京大学附属図書館長	松井 幸子	図書館情報大学図書館情報学部教授
千原 秀昭	社団法人化学情報協会専務理事	松浦 正	筑波大学図書館部長
津田 良成	愛知淑徳大学文学部教授	丸山昭二郎	鶴見大学図書館長
長谷川利治	京都大学大型計算機センター長	山崎 久道	株式会社三菱総合研究所情報管理部資料センター長
松田 芳郎	一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報セン-	山手 秀雄	東京都立中央図書館資料整理課長
安永 尚志	国文学研究資料館研究情報部教授	山田 尚勇	学術情報センター研究開発部長
山本 毅雄	図書館情報大学図書館情報学部教授	井上 如	学術情報センター研究主幹
若林 克己	群馬大学内分泌研究所附属ホルモン測定セン-	内藤 衛亮	学術情報センター教授
山田 尚勇	学術情報センター研究開発部長	宮澤 彰	学術情報センター教授
根岸 正光	学術情報センター教授	大山 敬三	学術情報センター助教授
大山 敬三	学術情報センター助教授	雨森 弘行	学術情報センター事業部長
小山 照夫	学術情報センター助教授		
雨森 弘行	学術情報センター事業部長		
課金委員会		紀要編集委員会	
石田 晴久	東京大学大型計算機センター教授	石田 晴久	東京大学大型計算機センター教授
養老 孟司	東京大学総合研究資料館長	開原 成允	東京大学医学部教授
小山 健夫	東京大学大型計算機センター長	加藤 誠己	上智大学理学部教授
牛島 和夫	九州大学大型計算機センター長	田畑 孝一	図書館情報大学総合情報処理センター長
軽部 征夫	東京大学先端科学技術研究センター教授	田村 俊作	慶應義塾大学文学部教授
越田 豊	大阪大学附属図書館長	長澤 雅男	東京大学教育学部教授
柴山 盛生	文部省学術国際局学術情報課学術情報企画官	松村多美子	図書館情報大学図書館情報学部教授
倉沢康一郎	慶應義塾大学研究・教育情報センター所長	山崎 弘郎	東京大学工学部教授
林 英輔	山梨大学工学部教授	西田 龍雄	学術情報センター副所長
星野 聰	京都大学大型計算機センター教授	山田 尚勇	学術情報センター研究開発部長
山本 毅雄	図書館情報大学図書館情報学部教授	井上 如	学術情報センター研究主幹
濱田 喬	学術情報センター研究主幹	濱田 喬	学術情報センター研究主幹
根岸 正光	学術情報センター教授	根岸 正光	学術情報センター教授
内藤 衛亮	学術情報センター教授		
奥田 昭夫	学術情報センター管理部長		
雨森 弘行	学術情報センター事業部長		



## 学術情報センター電話番号

\* 学術情報センターはダイヤルイン      ファックス(03)3814-4931 (管 理 部)  
 となっております。                              ファックス(03)3942-6900 (総 務 課)  
 電話番号は下表のとおりです。              ファックス(03)3942-9398 (事 業 部)  
     ファックス(03)3944-7131 (目録情報課)  
     ファックス(03)5395-7064 (研究開発部)

所 長	(03) 3942-6901	デ ー タ ベ ー ス 課 長	(03) 3942-6971
副 所 長	(03) 3942-6902	デ ー タ ベ ー ス 課 課 長 補 佐	(03) 3942-6972
秘 書 室	(03) 3942-6919	デ ー タ ベ ー ス 管 理 係	(03) 3942-6973
”	(03) 3942-6920	”	(03) 3942-6974
管 理 部 長	(03) 3942-6903	文 献 デ ー タ ベ ー ス 係	(03) 3942-6975
総 務 課 長	(03) 3942-6911	”	(03) 3942-6976
総 務 課 課 長 補 佐	(03) 3942-6912	全 文 デ ー タ ベ ー ス 係	(03) 3942-6977
庶 務 係	(03) 3942-6913	”	(03) 3942-6978
”	(03) 3942-6914	数 値 ・ 画 像 デ ー タ ベ ー ス 係	(03) 3942-6979
人 事 係	(03) 3942-6915	”	(03) 3942-6980
”	(03) 3942-6916	目 録 情 報 課 長	(03) 3942-6981
国 際 交 流 係	(03) 3942-6917	目 録 情 報 課 課 長 補 佐	(03) 3942-6982
”	(03) 3942-6918	図 書 目 録 情 報 係	(03) 3942-6983
研 究 協 力 係	(03) 3942-6909	”	(03) 3942-6984
会 計 課 長	(03) 3942-6921	雑 誌 目 録 情 報 係	(03) 3942-6985
会 計 課 課 長 補 佐	(03) 3942-6922	”	(03) 3942-6986
総 務 係	(03) 3942-6923	専 門 ・ 電 子 情 報 係	(03) 3942-6987
”	(03) 3942-6924	”	(03) 3942-6988
経 理 係	(03) 3942-6925	研 究 開 発 部 秘 書 室	(03) 3942-6956
”	(03) 3942-6926	”	(03) 3942-6957
用 度 係	(03) 3942-6927	山 田 研 究 開 発 部 長 室	(03) 3942-6904
”	(03) 3942-6928	井 上 研 究 主 幹 室	(03) 3942-6954
施 設 ・ 管 財 係	(03) 3942-6929	濱 田 研 究 主 幹 室	(03) 3942-6952
”	(03) 3942-6930	内 藤 教 授 室	(03) 3942-6958
共 同 利 用 課 長	(03) 3942-6931	根 岸 教 授 室	(03) 3942-6953
共 同 利 用 課 課 長 補 佐	(03) 3942-6932	淺 野 教 授 室	(03) 3942-6951
研 修 専 門 員	(03) 3942-6939	宮 澤 教 授 室	(03) 3942-6955
共 同 利 用 係	(03) 3942-6933	大 山 助 教 授 室	(03) 3942-6950
”	(03) 3942-6934	小 山 助 教 授 室	(03) 3942-6961
研 修 係	(03) 3942-6935	安 達 助 教 授 室	(03) 3942-6959
”	(03) 3942-6936	橋 爪 助 教 授 室	(03) 3942-6960
情 報 ・ 資 料 係	(03) 3942-6937	飯 田 助 教 授 室	(03) 3942-6962
”	(03) 3942-6938	桂 助 手	(03) 3942-6969
事 業 部 長	(03) 3942-6905	影 浦 助 手	(03) 3942-6968
シ ス テ ム 管 理 課 長	(03) 3942-6941	高 須 助 手	(03) 3942-6967
シ ス テ ム 管 理 課 課 長 補 佐	(03) 3942-6942	計 助 手	(03) 3942-6996
国 際 情 報 専 門 員	(03) 3942-6949	金 助 手	(03) 3942-6990
シ ス テ ム 管 理 係	(03) 3942-6943	相 澤 助 手	(03) 3942-6994
”	(03) 3942-6944	伊 藤 助 手	(03) 3942-6992
シ ス テ ム 業 務 係	(03) 3942-6945	佐 藤 助 手	(03) 3942-6966
”	(03) 3942-6946	孫 助 手	(03) 3942-6991
ネ ッ ト ワ ー ク 係	(03) 3942-6947	山 田 研 究 室	(03) 3945-3792
”	(03) 3942-6948	濱 田 研 究 室	(03) 3944-7504
国 際 事 業 係	(03) 3942-6907	淺 野 研 究 室	(03) 3944-7574
”	(03) 3942-6908	安 達 研 究 室	(03) 3942-6995

人事異動

発令年月日 (採用)	氏名	異動内容	旧官職等
4. 4. 1	林 雅子	事業部データベース課	
〃	平野 裕志	事業部目録情報課	
〃	赤堀 牧	事業部目録情報課	
〃	飯倉 忍	事業部目録情報課	国立国会図書館
〃	佐藤 真一	研究開発部システム研究系助手	
〃	孫 媛	研究開発部学術情報研究系助手	
4. 5. 1	奥村 直美	管理部総務課	
4. 4. 2	西田 龍雄	副所長 (企画調整官)	京都大学附属図書館長
(転入)			
4. 4. 1	池田 義春	管理部会計課長	文化庁文化財保護部 美術工芸課課長補佐
〃	濟賀 宣昭	事業部システム管理課長	筑波大学総務部情報処理課長
〃	菅谷 正昭	管理部共同利用課課長補佐	歴史民俗博物館管理部 資料課課長補佐
〃	高見澤光子	管理部総務課研究協力係長	東京大学海洋研究所 総務課共同利用掛主任
〃	阿保 博康	管理部会計課経理係長	国立信州高遠少年自然の家 庶務課会計係長
〃	鈴木 敬二	管理部共同利用課 情報・資料係長	北海道大学附属図書館 情報システム課
〃	米澤 誠	事業部データベース課 文献データベース係長	東北大学附属図書館 情報管理課係長心得
〃	志津田嘉康	事業部データベース課 全文データベース係長	山梨医科大学業務部 医事課情報処理係長
〃	山口 智之	管理部会計課	東京大学医科学研究所
〃	内田 邦夫	事業部システム管理課	極地研究所情報科学センター
〃	小陳左和子	事業部データベース課	富山大学附属図書館
〃	伊藤 春雄	研究開発部学術情報研究系助手	東京大学工学部助手
(所内異動)			
4. 4. 1	田中 義國	管理部会計課課長補佐	管理部共同利用課課長補佐
〃	渡辺 博	事業部システム管理課課長補佐	事業部システム管理課 システム業務係長
〃	大野 透	事業部データベース課課長補佐	事業部データベース課 データベース管理係長
〃	星野 雅英	事業部目録情報課課長補佐	事業部目録情報課 図書目録情報係長
〃	田中 榮博	管理部共同利用課研修専門員	事業部データベース課 数値・画像データベース係長
〃	貝田 辰雄	事業部システム管理課 国際情報専門員	事業部システム管理課 国際事業係長
〃	貝田 辰雄	事業部システム管理課 国際事業室長 (併任)	事業部システム管理課 国際事業係長

4. 4. 1	二宮 徹平	管理部総務課国際交流係長 (併任)	管理部総務課人事係長
〃	丹下 藤夫	事業部システム管理課 システム業務係長	事業部システム管理課
〃	貝田 辰雄	事業部システム管理課 国際事業係長 (併任)	事業部システム管理課 国際事業係長
〃	大西 直樹	事業部データベース課 データベース管理係長	事業部データベース課
〃	船渡川 清	事業部データベース課 数値・画像データベース係長	事業部データベース課 文献データベース係長
〃	酒井 清彦	事業部目録情報課 図書目録情報係長	事業部目録情報課 雑誌目録情報係長
〃	渡邊 俊彦	事業部目録情報課 雑誌目録情報係長	事業部目録情報課
〃	古田 雪乃	管理部総務課	管理部共同利用課
	(転出)		
4. 4. 1	小沼 加一	高エネルギー物理学研究所 主計課長	管理部会計課長
〃	大埜 浩一	名古屋大学附属図書館 情報管理課長	事業部システム管理課長
〃	加藤 光一	東京大学経理部契約課課長補佐	管理部会計課課長補佐
〃	清水 二郎	筑波大学総務部情報処理課長	事業部システム管理課 課長補佐
〃	由良 信道	滋賀医科大学教務部図書課長	事業部データベース課 課長補佐
〃	小西 和信	上越教育大学教務部図書課長	事業部目録情報課課長補佐
〃	油原ゆう子	国立婦人教育会館情報交流課 専門職員	管理部総務課国際交流係長
〃	梅原 英克	東京大学経理部契約課 用度第二掛長	管理部会計課経理係長
〃	吉田 登	東京大学生産技術研究所 総務課図書掛長	管理部共同利用課 情報・資料係長
〃	田沢 章博	大学入試センター管理部 庶務課共同利用係長	管理部共同利用課 共同利用係主任
〃	小原 一実	北海道大学工学部総務課	管理部総務課
〃	佐藤 洋之	東京大学経理部契約課	管理部会計課
〃	藤田 常	文部省学術国際局研究機関課	管理部会計課 (文部省併任)
〃	相原 信也	国立国会図書館	事業部目録情報課
	(停年退職)		
4. 4. 1	大野 公男		副所長 (企画調整官)
	(退職)		
4. 4. 30	鈴木 福一		事業部システム管理課 システム管理係長
	(併任)		
		併任官職名	官職名
4. 4. 1	大山 敬三	文部省学術国際局 学術調査官 (併任)	研究開発部 学術情報研究系助教
〃	橋爪 宏達	文部省学術国際局 学術調査官 (併任解除)	研究開発部 システム研究系助教

## 学術情報センター日誌

- |   |   |
|---|---|
| 3. 9 広島女子大学図書館森下事務長来訪                           | 4.23 池之上学術情報課課長補佐他2名来訪  |
| 〃 英国図書館ドキュメントサブライセンター<br>Jane Irisa氏来訪          | 4.28 研究ネットワークに関する懇談会  |
| 〃 中国科学院蘭州文献センター曹驊氏海外実務担当<br>研修受講                | 5. 7 オハイオ州立大学図書館森田氏来訪   |
| 3.16 鳴門教育大学東海課長来訪                               | 5.11 台湾師範大学図書館Ming-Jane Chen氏他<br>4名, 海外実務担当研修受講 ~13日                 |
| 3.17 徳島県立図書館一行見学                                | 〃 第1回ILL講習会 ~12日  |
| 3.18 富山県立図書館一行見学                                | 〃 カリフォルニア大学教授Michael<br>Buckland氏来訪                                   |
| 〃 灰色文献探偵団(東函協)25名来訪                             | 5.13 慶応大学三田情報センター梁瀬氏他3名<br>来訪   |
| 〃 南京大学助教授邵品洪氏見学                                 | 5.14 第2回ILL講習会 ~15日   |
| 〃 九州大学工学部武田正幸氏来訪                                | 5.15 英国シティ大学システム学部長<br>S. E. Robertson氏来訪                             |
| 3.25 京都教育大学図書館一行見学                              | 〃 台湾行政院国家科学委員会Tao-Hsing Ma<br>氏他2名来訪                                  |
| 4. 6 中国同済大学図書館長曲則生氏他2名見学                        | 5.18 ケンブリッジ大学小山氏, 及びオックスフ<br>ォード大学Izumi K. Tytler氏海外実務<br>担当研修受講 ~29日 |
| 4. 7 ローマ国立中央図書館司書Franco Toni 氏来訪                | 5.25 第1回目録システム講習会 ~29日  |
| 〃 国立国会図書館図書館協力部主査萩原愛一氏来訪                        | 6. 5 NACSIS-IR講習会第1回基礎I<br>コース  |
| 4.10 松田文部政務次官学情センターを視察                          | 6.11 第3回ILL講習会 ~12日   |
| 4.13 アルゼンチン・コンピューター研修調査団<br>Osavaido Clva 氏一行見学 |   |
| 〃 国際情報化センター黒沢氏来訪                                |   |
| 4.14 放送大学斉藤理事来訪                                 |   |
| 4.20 英国スターリング大学Val Hamilton氏来訪<br>~21日          |   |

## 海外渡航一覧

- |   |                                |
|---|--------------------------------|
| 3.11~3.18 内藤教授, 坂共同利用課長<br>(スウェーデン, ベルギー) | 3.24~3.31 安達助教授, 橋爪助教授<br>(米国) |
| 3.11~3.27 山田研究開発部長 (ベルギー, イタリア)           | 3.24~4.19 浅野教授 (フランス)          |
| 3.16~3.21 大野副所長 (台湾)                      | 4. 1~4.12 井上研究主幹 (米国)          |
| 3.20~3.29 金助手 (韓国)                        | 4.24~4.26 猪瀬所長 (韓国)            |
| 3.24~3.28 宮澤教授 (韓国)                       |                                |

学術情報センターニュース (第20号)

1992年6月30日発行

発行人 猪瀬 博

発行 学術情報センター 東京都文京区大塚3丁目29番地1号 (〒112)

電話 (03)3942-6937 (直通) 情報・資料係